

虫の闇

森岡 正作

曼珠沙華

父母の忌の遠くなりけり雁渡し
見得切つてゐる円熟の石榴かな
昼ちちろ鳴かせて蔵の喫茶店
背後には鬼もゐるべし虫の闇
追伸のやうに小鳥の遅れくる
年寄りの日や快晴といふ御負け
果てもなく引きをり貧乏かづらかな

登四郎先生は曼珠沙華の句を多く詠んでいる。その中で沖の人々に浮かんで来るのは、当然へ曼珠沙華天のかぎりを青充たすである。沖創刊の決意を込めた句であり、曼珠沙華の赤と天の青との強烈なコントラストに、血を滾らせる先生の充実度が感じられる。

今、わが家の田圃の畦には曼珠沙華が整然と咲いている。周囲も区画整理をされているので、花が一枚一枚の田を画するようで見事である。登四郎先生のもう一句、〈曼珠沙華一火が飛んで萱原に〉の「一火が飛んで」はまさに野の景であり、曼珠沙華の咲く様子を活写している。散歩していて曼珠沙華の一叢を見ては、どうしてこんな所にといつも思うのである。

また畦に曼珠沙華はよく合うのであるが、土竜を退散させる効果もあるとされている。